
クリスマスイヴの丘の上

Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスイヴの丘の上

【Nコード】

N7027P

【作者名】

Y

【あらすじ】

クリスマスにはびこる町中のカップル。

モテない僕達がそんなやつらに対してのささやかな抵抗を行う戦記。

「さあ、今年はデスクリスマスだ！」

まさかの展開にきつと驚くクリスマスイヴシリーズ第2弾！

君は知っているだろうか？

幸せになれるのは世界中の全員ではないということ。

皆は知っているだろうか？

イケメンリア厨達に全てを奪われた”僕達”のことを。

これは僕達がクリスマスという敵、カップル達という障害、サンタクロースという僕達に不幸せという苦水を飲ませる存在と戦う戦記である。

クリスマスイブの丘の上……僕達は永久の友情を誓った。

さあ、皆に見せてやろう。僕達の醜い底力を。

メリークリスマス　　今年は”デスクリスマス”だ！！

「周防、こっちの準備はできたよ」

「ああ、今行くよ」

今僕達は町外れの丘の上　そこに建てた小屋の中にいる。

……あ、説明が遅れたか。

すおつてんな

僕は周防天和。モテないボーイズ&ガールズ、そしてこれを見ている君と同じ存在だ。

少し向こうで普段は見慣れない機械をいじっているのはリム・F・リリーベル。名前の通り外国の人だ。

僕達がなにをしようとしているのか、それは”クリスマスを破壊する”準備だ。

具体的になにをするのかは追々説明したいと思う。

「ねえ周防、椎名やガンホーはまだ来ないの？」

「まだ集合時間より10分早いからね。もう少しでくるんじゃないかな」

「ようやくこの日が来たんだね……奴等に復讐をするときが！」

モデルガンのライフルの装弾を済ますリム。

危険だからこんなところでそんなもの振り回さないで欲しい。

「ちーっす。お、早速やってるねえ」

「ふむ、俺達が最後だったようだな」

小屋の扉を開けて入ってきたのは俺達の仲間、椎名柚貴しいなゆずきと蒲生北郷がもつほんけいことガンホーだ。

「遅いです二人共」

「なーんだよ、まだ集合時間には早いだろ」

悪態をつくりムに対してもっともな正論を言う椎名。まあ別に柚のヤツは悪くないと思うからフォローしてやるかな。

「こらリム、そんな怒ることないだろ。遅れたわけじゃないんだからさ」

「わ、わかつてるよ……ただ早く準備は済ませとくに越したことはないでしょ」

「ふむふむ、確かに正論だね。というわけで柚、ガンホー。早く仕事仕事」

「わーつつたよ。つつてもまあ俺の作業はもう終わるところなんだけどな」

「ならこっちの作業を手伝ってくれんか……まだ少し時間がかかりそうだ」

「えー？ガンホー、おめえ身体でえんだから一人でやってくれよ」

「俺の身体がでかいのは関係ないだろう……それに作業とは皆で協力するものだ」

「そういうことだ柚。そっちが終わったらガンホーを手伝ってやろう。僕も手伝うからさ」

「さすがリーダーだな、椎名も少し見習え」

「うっせえデカブツ。周防ばかりし棚に上げてんじゃねえや」

「こら柚、喋ってばかりいないで作業に集中しないか。リムはもう終わったといっていたよ」

「別にいいだろ、まだ時間はあるんだし」

「クリスマスが今年もやってくるー」

「やああああめえええろおおおお！！！！そんなデスソングを聞かせるんじゃないっ！！！」

「もう、ならちゃんと作業してください椎名」

「ふざけやがって……おいリム！てめえいい加減に」

「ジングルベージングルベー、鈴があー鳴るうー」

「ぎゃああああああ！！！！悪魔の鈴があああああ！！！！」

まったく……仲が良いのか悪いのかよくわからない連中だ。そつだ、ここで教えておこつ。

我等の部隊の名は”DC”（デスクリスマスの略）。

僕達はリア厨達が楽しくしているのを羨ましく思いそれを破壊して

やろうという集団だ。

そして僕はその部隊の全7部隊の中での第4部隊のリーダーをやっている。

メンバーには当然クリスマスを呪う理由がある。

リムは工業高校の出身なので場の空氣的にろくに恋愛をすることができなかった。

工業高校は女子にくらべて圧倒的に男子の数が多いので男子もなかなか声を掛けづらいのだろう。

リムはまあ僕から見たら可愛いと思う。

え？じゃあお前がデートにでも誘えって？

いやまあ……そういうわけにもいかないんだよ。察してくれよ。

柚……椎名柚貴はその軽そうな態度から女の子から”よく遊んでそんな人”にみられているらしい。

見た目とかからもそういう雰囲気は伺えるけど本人曰く恋愛経験も異性との関係を持ったこともないという。

ガンホー……蒲生北郷は学校生活はずっとラグビー部の活動に汗を流していたそうだ。

その大きな身体も相まって少し怖がられていたのか、恋愛事などにはまったく関与したことがないとか。

僕は……僕理由は少し複雑だ。

まあそのうちわかると思うから今は言わないでおくよ。

さて、大方の準備は終わったようだ。

今日は12月24日、クリスマスイヴ……僕達の作戦決行日時だ。

僕達の任務、それはこの町に大きな円になるように配置されたクリスマスツリーを模したイルミネーションを25個全て破壊すること。

そしてその円の中心にあり、25日0時になった瞬間にライトアップするという巨大クリスマスツリーも破壊すること。

え？立派なテロ行為じゃないかって？

確かにそうかもしれない。というかそれ以外の何者でもないと思う。それでも僕等は抗うしかないんだ。それもこんな形でしか抗えないなんて哀れだと思わないか？

もし思うのだったら僕達に似合う良い異性を紹介して欲しい。

ま、冗談はさておきそろそろミッシェンスタートの時間だ。

僕達の任務は一人一つ、合計4つリムお手製の爆弾を使ってツリーを破壊すること。

「さあみんな、そろそろ行こうか」

「周防、椎名が戦闘不能だよ」

「来るなっ……お前の服が基本赤なのは返り血なんだろう！？なあ、殺人鬼S・クロース！？」

「おい柚、柚っ……駄目だ。完全に死んでる」

「どうするの？」

「……こうする」

僕は息をゆっくり吐くと1、2の、3で歌いだす。

「真っ赤なお鼻のー、トナカイさんはー、いつもみんなのー、わーらいものー」

「嫌だあああああ！！！！笑いものになりたくねえええええ！！！！」

「！」

「あ、起きた」

「デスソングで復活するとはよくわからんな」

「ガンホー、君も体感してみる？」

「……断つておく」

「そうかい」

「……とまあおちゃらけもここまでだ。
そろそろミッションに行かなくては。」

「ああ！リア厨のやつらに目にももの見せてやるうぜー！」

「柚……君は本当に哀れだね……。いや、良い意味も悪い意味も含めて」

「えーっと……うん、爆発の威力にも問題ないと思う……いけるよ」

「では行くか！」

「よし……各自、散開！」

こうして僕達のミッションが始まった。

皆小屋を出てあらかじめ指定しておいたポイントへ爆弾を仕掛けに
まっしぐらに走っていった。

僕は小屋の中へ一人残される……いや。

「お前もいたっけな、イヴ」

物陰からこそつと現れたのは白い猫。

ここで活動する内にいつしか顔を合わせるようになったのだ。

僕が初めてみたイヴの日の雪のようなインパクトの強い美しい白い毛並みを持っていたのでイヴと名づけた。

クリスマス関係に敵対しているはずの僕だったがそのイヴという名前がとても似合っていると僕は思っている。

「お前も来るかい？」

にやあ、と一声なくとイヴは僕の肩へぴょんと乗り込む。

「軽いなお前……ちゃんとご飯食べているのかい？」

にやあ、とイヴは返事をしたが僕には当然なんと言っているのか理解できない。

まあ元気そうだしちゃんと食べているのだろう。

「じゃあ行こうかイヴ。クリスマスデートに連れて行ってやるよ」

にやあ、とまたイヴは一声鳴いて僕の言葉に返事をした。

「なんか賑やかだね、やっぱり」

カップルなどで賑わう町の中、僕とイヴは歩いていた。

綺麗なイルミネーションがピカピカ光り、いつも見る風景とは違う町はまるで別世界のように思えた。

でも、僕達にとってはその光りは絶望でしかない。

決して僕達はリア厨にはなれないのだ。

「イヴ、お前もそうなのかい？」

「やあ、とただイヴは鳴くだけ。

「そうかい」

猫と話をすることは叶わないが言いたいことはなんとなくわかる。

イヴは今この状況を楽しんでいるようだ。

「お前は気楽でいいな」

「やあ、と鳴いたイヴが「そうでもない」と言っているように聞こえた。

しばらく歩いている内に目標ポイントの一つ　クリスマスツリーにたどり着いた。

「イヴ、ちよつと降りてな」

イヴを肩から降ろすと僕は小型の爆弾をポケットから取り出しツリーへと歩く。

まったく忌々しいな……こんなものは僕達を不幸せにするだけだというのに。

そつと爆弾を木の根の影に設置するとなに食わぬ顔でイヴのところへ戻る。

「ただいまイヴ」

「やあ、と鳴いたイヴは多分「おかえり」とか言ってくれたに違いない。」

「じゃあそろそろ小屋に戻ろうか。イヴ、お前も寒いだろう？」

イヴは鳴かない。

「なんだい、もう少し歩いていたいのかい？」

「やあ、とイヴは鳴いた。」

「お金はないから何も買ってやれないけど……いいよ、デートの続きだ」

なんとなく、だけれど僕にはイヴが嬉しそうに鳴いた気がした。そんなわけで僕達は小屋へは戻らずにしばらくこの綺麗で汚い町を歩くことにした。

「まったく……猫は炬燵で丸くなるんじゃないのかい？」

「やあ、と鳴くその仕草には「他の猫と一緒にするな」と言っているように見えた。」

「はははっ、猫にも厨二病があるとは知らなかった」

外から見ていたら僕は相当の変態に見えたことだろう。でも僕は楽しいからいいんだ。

僕が楽しいからきつとイヴも楽しい。そんなものだと思うよ、僕は。

「ただいま」

「周防、遅い！一体どれだけ時間をかけているの！？」

「……ごめん」

結局小屋に帰ってきたのはあれから1時間後。

目標時間の0時までもう30分をきつていているところだった。

「……！まさか周防、例のやつらにまたなにか……」

「違うよりム、僕がなんのために”僕”と名乗っているか忘れたの？」

「そりゃ……忘れてはいないけど」

「だったらいいんだ。……そっちの首尾は？」

「上手くいったわ。後は待つだけね」

「そうかい」

僕は小屋の床へ腰を下ろす。

暖房が効いているので寒いということはなかったがやはり座り心地

がいかんせんよくない。

イヴもいつの間にかどこかへ行ってしまったようだ。

「なにか飲む？」

仮設したキッチンへ向かっていたリムが僕へ声をかけた。

外から帰ってきたのだ、いくら暖房が効いてるとはいえ少し暖かいものが飲みたい。

「じゃあ、ココア頼める」

「お安い御用よ」

ふう、目標時間までは後は待つだけ……か。

なんだかあつという間のことだったな。

「隣、いいか？」

「ん？ああ、いいよ」

そういつてドスン、と僕の隣に座ってきたのは大きな身体のガンホーだった。

「もうすぐ俺達の務めが終わるな」

「そうだね」

「……あつという間だったな」

「僕も今そう思ってたところ」

「そうか」

「……ねえ、ガンホー」

「なんだ？」

「僕はね、今まで短い間だけど君達といて楽しかったよ」

「……俺もだ」

「でもやっぱりまだ怖いんだ……君と、柚が」

「仕方あるまい。……辛いことだったんだろう？」

「……嫌な記憶がこうしていつまでもつきまとうからさ、せめて楽しい記憶もずっとつきまとうてくれたらなって思うんだ」

「……それは俺達のことか？」

「うん、皆と過ごしたこの数日はとても充実していた。リアルがね。」

「リア厨……とはまた違うのか」

「どうだろうね」

自分達が敵対していたものに今自分達がなっている……おかしい話だ。

「でも君達のおかげで多少僕の……アレがマシになったのは確かだよ」

「そうか、それはよかった」

ガンホーはずっと窓のほうを見ている。

今後のクリスマスツリーの惨状が気になるのだろうか。

「では、俺は先に外に出ている。また後でな」

「うん、また後で」

手をふり見送るとドアのところですれ違つように今度は柚が現れた。

「……隣」

「いいよ」

言いたいことはわかっていたので先に言ってやった。

「なんだよ、調子狂うな」

「なんの調子だよ、なんの」

相変わらずというべきか、柚はよくわからないやつだ。

「なあ周防」

「……なんだい？」

「まだ駄目なのか……例のアレは」

「……少し、ね」

「これはさ、それを視野に入れての話なんだけどさ……」

私のアレを視野に入れたことでの話……まさか。

「俺と付き合う……ってのはやっぱりなしなのか？」

……やっぱりか。

告白されるのは実は初めてではないのだが……。

「……ごめんね、ちょっとまだ整理がつかないよ」

「……椎名」

そこへ現れたのがココアを持ってきたリムだった。
ナイスタイミングなのかナイスでないのかよくわからない。

「あのね、告白するなどは言わないですよ。でもせめて周防が”僕”から”私”に戻るまで待てませんか？」

「……すまねえ」

「リム、別に僕は」

「周防」

「……はい」

「……なんでもないよ」

時計を見るともうまもなく日にちをまたぐ……0時に近い。

「二人共、そろそろ行こう。ライトアップが始まる」

「ええ」

「わかった」

外へ出ると第4部隊だけでなく全部隊の人たちが丘に集まっていた。

「よう周防、今日の勤めご苦労だったな！」

「ええ、ボスこそ今までお疲れ様でした」

「まあまあ、そいつを言うのは全部が終わってからだぜ」

僕が話していたのは全部隊を束ねる存在　ボスと呼ばれる人物だった。

もともとこれだけの人数が集まったのはネットでボスがモテない人たちが集まるサークルを作ったおかげでもある。

「もうすぐ……ですね」

「ああ……よしお前ら！カウントダウンいくぞおー！」

「「おおーっ！……！」」

「10！9！8！……」

そうして爆発へのカウントダウンが始まる。

どいうことになるのかは実際に0時を迎えなければいけないので僕は心なしか、わくわくしていた。

「7！6！5！……」

これが終われば僕達のつながりもこれでお終い。

そこからは、なにもない。

「4！3！2！……」

さあ、僕達がこの数日で成し遂げられることはどれだけ大きいことなのか。

あいつらに見せてやろうじゃないか。

0時に町中央にある大きなクリスマスツリーがライトアップされる予定なので周囲の市民やカップル達はそれを目当てに観客がたくさんいるはずだ。

そうやって注目が集まっているところを……ふふ、想像しただけで楽しくなってきた。

「1！……0！」

「イイイイヤッツホオオオオー……！！メリー……クリ

スマー——————ス!!!!!!」

ドカー——————ン!!!!!!!!!!

カウントダウンの0とともにライトアップされるはずのクリスマスツリーは見事に爆発した。

綺麗なライトアップじゃないか。

「さあ皆、サツが来るまで飲み明かそうぜえ!!」

さて、今から警察がここへ来るまでしばし宴の時間だ。

皆して「リア厨さまあ!!」とか言っている。まったくその通りだ。そうやってしばらくドンチャン騒ぎをしているとパトカーの音が聞こえてくる。

「…………もう来たのか……。おめえら! サツが来たが決して逃げるんじゃない! そいつはリア厨へ負けたことをみとめるってことだぜ!」

ボスは毎回めちゃくちなことを言うがなぜか説得力がある。

まあそんなことはもとよりサークルのルールだったが。

次々とつかまる仲間達……もちろん私だって例外じゃない。

手錠に繋がれパトカーへと連れて行かれる。

こんな時考えることは「ああ、手錠って冷たいな」とかそんなくだらないことだった。

パトカーに乗り込むと窓からなにか動いているものが雪の中に見える

る。

あれは……。

「……イヴ？」

そうか、もうあいつには会えないのかな。

そう考えると少し目頭が熱くなる。

あいつは僕……いや、私の始めてのデート相手だったな。そういえば。

「さようならイヴ。多分初恋だったよ」

パトカーが動き出す。

最後にイヴがにゃあ、と鳴いたのかどうかはわからなかった。

（後書き）

クリスマスイヴの丘の上、どうでしたでしょうか？

短編にもまさかの展開というものはどうしてもつけたくて主人公を
あんな感じにしてみました。

まだこれから見るという人は是非読んでみて、そして「まさか！」
と読んでいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7027p/>

クリスマスイヴの丘の上

2010年12月31日01時03分発行